

NP-PAKism

エヌピーパックイズム

2013 / 1月号

vol.16

環境や資源の保護に優れた容器「紙パック」を提供する「日本製紙株式会社 紙パック事業本部」が、リサイクルのさらなる推進を願って発行する環境情報誌です。

環になる人を結ぶ 4

佐野武男さん

丸富製紙株式会社 代表取締役社長

何事にも挑んでいく精神で
次なる時代を切り開く

日本では、1953(昭和28)年から古紙を利用した再生紙の生産が本格的に始まりました。静岡県富士市にある丸富製紙は、1955(昭和30)年、ちり紙生産メーカーとして操業を開始。その4年後に古紙を原料としたトイレットペーパーの生産を開始し、1975(昭和50)年にはその生産量で業界第一位となります。

それまでの使い捨ての時代から、環境問題が叫ばれるようになった1980年代、「全国牛乳パックの再利用を考える連絡会」の前代表である平井初美さんの呼びかけにより、使用済み紙パックのリサイクルが始まりました。当時古紙回収品目から除外されていた牛乳パックを古紙原料として受け入れたのは、この丸富製紙だけでした。どうして受け入れを考えられたのか、紙パックリサイクルのパイオニアである丸富製紙の佐野武男社長に、紙パックリサイクルの歴史や、「環境にやさしい企業を目指して」をスローガンにした取り組みについて伺います。

佐野武男さん



プロフィール
佐野武男（さのたけお）

1955年、静岡県生まれ。アメリカ合衆国オハイオ州マイアミ大学応用化学部製紙工学科卒業。
1985年、丸富製紙（株）沼津工場取締役工場長として入社。
富士根工場取締役工場長などを経て、2004年同社4代目となる代表取締役社長となる。
2012年現在、日本家庭紙工業会理事など務めるほか、富士市教育委員に携わっている。

何事にも挑んでいく精神で 次なる時代を切り開く

「積極的に設備の近代化を図ること—これは創業者である佐野富男が、重点を置いてきたことの一つです。『家庭紙とは、古紙再生とともにある』という理念をもち、古紙原料を用いた家庭紙メーカーとして、常に試行錯誤を繰り返しながら歩み続けてまいりました」

1970年代、「汲み取り式」から「水洗式」へ、「和式」から「洋式」へと変化し始めた日本のトイレは、それまでの不淨空間から大きくイメージを変え、トイレットペーパーがちり紙に変わつて普及していきました。時を同じくして、オイルショックが起ります。1973（昭和48）年、第四次中東戦争が勃発したことによる原油価格の引き上げは、製紙業界にも大きな影響を及ぼしました。紙の原料である輸入木材チップの高騰は、パルプから作つて新聞紙の原料を古紙に替え、古紙原料そのものまた、大量不足となっていました。消費者の間では、「紙がなくなる」という噂が広まり、トイレットペーパーの買い占め騒動が起きました。

昭和46年に完成した富士根工場に、廃棄物（ポリエチレン）処理設備を設置し、廃棄物の完全資源化を実現することで、昭和57年、丸富製紙は日本で初の「紙パックをリサイクルする工場」となりました。それから2年後の1984（昭和59）年、紙パックリサイクルに再び大きな転機がやってきます。山梨県大月市の母親サークルの代表であった平井初美さんが、集めた牛乳パックの再利用ができないかと丸富製紙を訪ねます。どこの製紙会社でも断られた使用済みの紙パックの受け入れを、このポリエチレンの再処理施設が可能になりました。

し、紙に直接印刷する一般の古紙とは違い、表面のポリエチレンに印刷がされているため、それを剥がせば真っ白なわけです。これは使わないわけにはいかないと、ポリエチレン処理の研究を開始しました。ポリエチレンフィルムは燃やすと高熱を発するため焼却炉を傷めてしまい、当時は埋め立てしか処理方法がなかったからです」

「市民運動の代表という前に、平井さんもまた大切な消費者のひとりでしたし、次の世代へモノを大切にすることの心を伝えたい」という志は私どもも大切にしたいと思いました。悪臭がでないように、軽くでも洗つてもらえば、そしてまた開いてもらえばより助かりますと受け入れを承諾しました。とはいえた。当時、ポリエチレンでラミネートされた紙パックは古紙に入れてはいけないものとして、すべて焼却処分されていました。とにかく使ってみようとパルパーに入れてみたものの、すさまじい量のポリエチレンが出てしまい、再利用は無理ではないかと思われました。しかし使ってみると、針葉樹のパルプを使用している紙パックはとても上質なものでした

「産業古紙」紙パックリサイクルが始まる

「古紙不足をどうにか乗り切るうと模索していたところ、御殿場にあつた紙パックメーカーの工場から白い損紙が大量に出ているという情報が入りました。当時、ポリエチレンでラミネートされた紙パックは古紙に入れてはいけないものとして、すべて焼却処分されていました。とにかく使ってみようとパルパーに入れてみたものの、すさまじい量のポリエチレンが出てしまい、再利用は無理ではないかと思われました。しかし使ってみると、針葉樹のパルプを使用している紙パックはとても上質なものでした

「市井運動の代表という前に、平井さんもまた大切な消費者のひとりでしたし、次の世代へモノを大切にすることの心を伝えたい」という志は私どもも大切にしたいと思いました。悪臭がでないように、軽くでも洗つてもらえば、そしてまた開いてもらえばより助かりますと受け入れを承諾しました。とはいえ当時の社長であつた私の父（故佐野廣彦会長）も、当初それほどの量が集まるわけがないだろうと思つていました。それが平井さんの努力により、次の年には全国パック連という組織も立ち上がり、みるみるうちに全国へと広がつていきました」

使用済み紙パックの受け入れと同時に、丸富製紙もまたリサイクルの啓発に進んで取り組んでいくこととなります。

古紙回収量全体では、わずかな量の紙パックが古紙回収品目の一つになつていてことには、これらの努力があつたからと言えるかもしれません。平井さんと佐野会長とは、何度も協議を重ねたと言います。「次はこうしようね、佐野さん、とか、こんな大会を企画してみようよとか、平井さんが会社に情報を持つていらして、こちらも活動しながらいろんな提案をしてみたりと、私たちは共同歩調しながら、互いに成長していくたと思います」

未来を考えることは

紙パックの回収は回収率においてはほぼ横ばいの状態が続いています。佐野さんは紙パックのリサイクルには、単に回収することだけではない大切なものがあると言っています。



年間160団体、6000名の見学者を受け入れ、牛乳パックの再利用について勉強する。

見学には入場券として牛乳パック1枚を持ってきてもらう。



◆ 小学校へ配布している回収箱。児童が毎日飲む牛乳を洗って開いて乾かして回収箱に入れる。

▼ 牛乳パック回収車。県内の小中学校、スーパー、団体等から年間150tの牛乳パックを自社回収している。



現在、多くの学校で学校給食用紙パックのリサイクルが行われています。子どもたちにとって、牛乳パックというのは、リサイクルを学ぶ一番身近な素材と言えるでしょう。私どもは小学生の見学を積極的に受け入れています。紙パックが毎日使つていてトイレットペーパーに生まれ変わるわけです。その過程を目の当たりにすることで、リサイクルということを実感することができます。その子どもたちが大人になったとき、紙パックのリサイクルはより日常的なこととなっているでしょう。今を大切にすることが、よりよい未来を築くことに繋がっていくのではないか、そんなふうに考えています」



静岡県の特産品である緑茶から抽出した天然の消臭成分「ティーフラボン」が生きているトイレットペーパー。ユニークな企画を行うマーケティング部は女性で構成されているという。

よりよい家庭紙を提供するために

日本製紙グループ

日本製紙クレシア株式会社

当社で紙パックを製造する際に排出される損紙は、産業古紙として、グループ会社の日本製紙クレシア株式会社（以下Crecia）にてリサイクルされています。

Creciaは、大手バージンパルプの家庭紙メーカーとして、1963年に一般家庭用トイレットペーパーを、1964年にティッシュを、日本で最初に生産・発売しました。

資材調達部の藤永達也さんに、Creciaと紙パックリサイクルについて伺いました。

紙パックの生産が始まったころ、その製造工程で発生した損紙を使用できないかという話があり、東京工場（埼玉県草加市）にポリエチレン付き紙パックのリサイクル設備を導入し、リサイクルを始めました。導入した理由は、良質な原材料を確保するためですが、私たち家庭紙メーカーの立場からその価値を考えるとき、単にコスト面や繊維の質の高さというだけではなく、蛍光染料の使われていない紙だということがとても大きいです。パルプ物の家庭紙に蛍光染料の入ることは許されませんから。

Creciaでは、紙パックを「バージンパルプ」並の高品質なパルプと位置づけた捉え方をしています。紙パックを配合したトイレットペーパーも、100%バージンパルプのものと同じく、現在Creciaの主力商品となっています。

柔らかさでは、バージンパルプに勝るものはないのです



が、エンボスの技術の発達により、紙パック入りのパルプでもふんわりとした肌ざわりが可能になりました。私、個人の好みでいえば、紙パック配合のしまった感じが好きですね。

紙パックは古紙問屋さんから購入しています。使用量だけでいえば、国内からくる紙パックの3分の1は当社で使用していることになるでしょうか。また、東京工場では、印刷されていない紙パックの損紙を海外から一部輸入して使用しています。

原料として安定している紙パックですが、更なる回収率のアップのために、近隣の小学校や中学校の工場見学を積極的に受け入れ、未来を担う子どもたちに環境教育の一環としてリサイクルの啓発を行っています。近頃は子どもたちだけではなく、問屋さんからの依頼で高齢者やいろいろな団体の方など、一般の見学者も増えてきました。またスーパーを中心とした夏休みのイベントなどでも、たくさんの小学生が訪れます。見学は1時間半から2時間くらいです。直接学校に回収に行けなくとも、こうした活動を通して、啓発の支援を積極的にしていきたいと思っています。



赤星たみこの Milk Break

今では当たり前になった牛乳パックのリサイクルですが、始まった当初はさまざまな課題があったと聞きます。まずポリエチレンの皮膜を剥がす工程が大変難しかったこと、紙パックのリサイクルは難しくてモノにならないという社会通念を覆さねばならなかったこと、などです。

小中学校が積極的に牛乳パックの回収を行い、地域全体がその重要性に気づいたことがリサイクルの大きな後押しになりました。子供たちが紙パックを回収してくれるのはとてもありがたいですね！

何でも使い捨て、という時代はとっくに終わり、使えるものを大事に長く使うこと、使用済みの紙パックを新たな資源にすること、これは日本が昔から培ってきた美しい文化です。この文化、ずっと大切に育てていきたいと思います。



赤星たみこ © 漫画家・エッセイスト。エコや家事に関する連載や著作多数。環境問題の講演会でも活躍中。

2011年度

紙パックリサイクルの実態

全国牛乳容器環境協議会(容環協) 調査より

2011年度の紙パックの回収量は、105.7万トン、回収率は42.9%（対前年0.7ポイント減）、使用済み紙パックの回収率は、32.5%（対前年0.5ポイント減）ほぼ横ばいという状況です。

回収量が全体の3/4を占めている使用済み紙パックは、雑がみへの混入や家庭内で再活用されることなどが、回収率の伸び悩みの原因と考えられています。

今後も紙パックの分別の促進を、容環協と共に取り組んでいきたいと思います。

日本紙パック株式会社は、平成24年10月1日をもちまして日本製紙株式会社、日本大昭和板紙株式会社、および、日本製紙ケミカル株式会社との合併により、日本製紙株式会社紙パック事業本部となりました。社員一同新たな決意をもって鋭意努力してまいります。どうぞよろしくお願ひいたします。



日本製紙株式会社 紙パック事業本部 環境情報誌 NP-PAK ism Vol.16 2013年1月発行

編集：日本製紙株式会社 紙パック事業本部 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2

TEL (03) 6665-5555 (代表) FAX (03) 3212-0605

e-mail npp-qa@nipponpapergroup.com URL http://www.nipponpaper-pak.com